

第五章 戦前、戦後に渡ったグアタパラ耕地での弘田千代太氏

*弘田千代太 1910年旅順丸第2回移民、高知県三崎町出身、妻光野、長男秀馬、また文野数馬、その妻専、長男文野茂重等とグアタパラ耕地に配耕される。文野専は千代太氏の実姉である。

1915年8月平野植民地開拓の折、入植当年の暮れの12月29日文野専は植民地でのマラリア病第一犠牲者であった。

弘田氏は平野植民地ドラードス河沿に70アルケーレスの土地を購入した。グアタパラ耕地の監督も続けながら両方をこなし、植民地へ出かける折は、息子秀馬に仕事を委任していた。マラリア病の猖獗という、余りの惨状に甥の文野茂重と残った家族の中で、移転を希望の方々をひきつれてグアタパラへ帰る。その後文野茂重はコチア植民地へ移転する。



千代太氏は1920年には事業拡大のため日本へ帰郷し、同郷、親戚の人達を連だて、同耕地に戻る。当耕地に於て米作、綿作、牧畜等色々な仕事を手がける。息子の秀馬はグアタパラ駅附近のイタリア人経営の砂礫採集地を買い受けブラジル人を使い、鉄道ワゴン車で砂、小石をアララクワラ方面へ建設用に売っていたが、この秀馬は肺を患い、治療、療養するが亡くなる(1926年頃)。

1932年妻弘田光野さんが日本へ帰郷し、その折故郷で姪愛味(よしみ)さん当時15歳、甥植田とういちさんを息子秀馬の7年忌に間に合うよう連れだてて帰伯した。

長い間グアタパラ耕地に於いて監督、通訳に携わり、晩年は甥の植田とういち氏に譲り、1946年9月リンコン市にて75歳で永眠する。煉瓦製造工場(旧モジグアス川鉄橋前の工場)を宮村氏(伯人の間では以前と変わらず弘田煉瓦製造工場云いつがれる)が経営するが、新法令に従って1953年に(1951年ゼッリオ・バルガス代16代大統領になると法令改革。特に労働法が著しく改革されると、過去にまで遡って訂正され使用している労働者の年金を清算)煉瓦工場を売却しても、その清算代金には足らず、銀行より借入れして整理した後にリンコン市へ移転した。

愛味さんの夫、宮村さんがリンコン市で歯医者をしており、光野さん等はそこに身を寄せていた。そして光野さんも1965年3月にリンコン市に於いて80歳で亡くなられた。グアタパラを離れたのは、戦後移民が(1962年)入植することが決まったので醜態をさらすことを避けるため植田とういちさんはサン・パウロ市へ移転。

グアタパラ市街地のUETA THOITI通りは弘田氏の甥の名前(植田とういち)が付けてある(現在もこの名で存在している)。砂礫採取事業の方は植田とういちさんの息子実さんが経営していたが、植田さんがサン・パウロ市へ移転する頃やはり整理してリベイロン・プレート市へ移転した。

千代太氏は1933年6月18日の渡伯日本移民25周年記念祭では、移植民社会事業の功労者、耕地通訳として表彰される。30年以上もグアタパラの地域に生活された弘田さんであり、グアタパラを離れようとその

気持は一抹の侘しさだったろう。この25周年記念頃の配耕者の方々、出県別で北海道3戸、福島1戸、新潟2戸、神奈川1戸、静岡1戸、長野1戸、富山1戸、岐阜2戸、三重1戸、和歌山1戸、兵庫1戸、岡山5戸、広島12戸、山口2戸、愛媛1戸、高知3戸、熊本24戸合計62家族されていた。出身県の記録は「在伯日本移民25周年記念誌」より抜粋。(宮村愛味さんの記憶を追って)



リンコン市の共同墓地に入ってすぐ左側に弘田千代太氏の墓碑がありそこには他に*弘田秀馬 生 1896.6.15 歿 1927.5.16 (息子 31 歳)、*IKUHARA SADAMU 生 1937.9.1 歿 1951.6.28 (14 歳) *弘田光野 生 1876.1.10 歿 1965.3.19 (妻 90 歳) 4 名のメモリアルを見ることができる。